

日本と英語のなぞなぞ比較 (2)

——反復用法を中心に——

清海節子

1. はじめに

なぞなぞは、子供のことば遊びであり、言葉による問いかけとそれに対する答から成立している。問いかけには、反義語や繰り返し表現がしばしば使用されている。清海(2012)は、反義語に注目して、日本と英語のなぞなぞを比較検討した。その結果、英語のなぞなぞと比べると、日本のなぞなぞには、動詞の反義語が2.6倍近く多く見つかるという興味深い発見があった。言語によって、反意性を示す品詞の割合が異なることは、言語とことば遊びの関連性が示唆され、言語がことば遊びにある程度の影響を及ぼすと推測できる。

本稿は、反復用法に関して、日本と英語のなぞなぞを比較する。なぞなぞには、音や語句などの繰り返しが多く観察されている。二言語間で反復用法を検討し、共通点と相違点を明らかにしていくことが本稿の目的である。サンプルデータとして、『世界なぞなぞ大辞典』(1984)で紹介されている「日本本土のなぞなぞ」と「イギリスのなぞなぞ」を参考にし、日本の伝統的な子供向けの「二段なぞ」と、英語のなぞ¹⁾を比較検討する。サンプル数は日本の二段なぞが158で、英語のなぞは130である。²⁾

本稿の構成は以下の通りである。次の2節では、反復の機能と、頭韻や脚韻等についての説明がされる。3節では、日本の二段なぞの反復にかんする調査結果が述べられる。4節では、英語のなぞの反復を取り扱う。5節では、調査された結果から類似点と相違点を考察し、なぞなぞに於ける反復表現での中心的な役割について提言を試みる。最後の6節では結論が述べられる。

2. 反復の機能

最初に、反復(繰り返し)の機能について考えることにする。反復表現は、なぞなぞ以外のジャンルでもしばしば観察される。例えば、奥津(2000:34)は、日英のことわざで、反復(repetition)は、印象を強くする外形上の技巧としてとらえ、次のような例を挙げている。³⁾

- (1) There's no fool like an old fool. (老人の馬鹿ほど馬鹿なものはない)

Love me, love my dog. → 「愛屋鳥に及ぶ」

No money, no Swiss. (金がなければスイス人は雇えない。)

→ 「金の切れ目が縁の切れ目」

「海に千年山 (河) に千年」

「聞いてびっくり 見てびっくり」

以上の例では、日本語にも英語にも、繰り返しが技巧として用いられていることが分かる。また、日本語の3例は、助詞の「の」「に」「て」も繰り返されている。

奥津は、「反復」とは区別して、「頭韻」と「脚韻」を個別の表現形式として捉え、以下のように例を挙げて説明している（韻を分かりやすくするために、下線は筆者が書き入れた）。

- (2) 「頭韻」

Manners make the man. (礼節が人を作る。)

Spare the rod and spoil the child. 「可愛い子には、旅をさせよ」

Care killed the cat. 「心配は身の毒」

Live and learn. (長生きすれば、いろいろなことを見聞できる。)

Dead men tell no tales. 「死人に口なし」

「薬 九層倍」⁴⁾ 「無くて七癖」 「仲人七嘘」

- (3) 「脚韻」

Man proposes, God disposes. (計画は人にあり、成敗は神にあり。)

Might is right. 「勝てば官軍負ければ賊軍」

East, west, home is best. 「家ほどよい所はない」

An expensive wife makes a pensive husband.

(金のかかる妻をもらえば夫は気が重い。)

「亀の甲より年の劫」 「金の切れ目が縁の切れ目」 「安かろう悪かろう」

「頭韻」と言うと、英語では、最初の子音の呼応を扱うのだが、日本の例を見る限り、奥津は、/ku/(「薬 九層倍」)と、/na/(「無くて七癖」 「仲人七嘘」)の例のよ

うに CV という音節を考えている。また、脚韻は、日本語の例として「亀の甲より年の劫」では 同音異義語の /koo/ であり、「安かろう悪かろう」では、同形の語尾変化の /karoo/ を脚韻と捉えている。さらに、奥津は「金の切れ目が縁の切れ目」での同語反復を、「反復」と「脚韻」の両方の表言形式の例としている。一般的に脚韻を踏む二語は、音的に同じでも意味は異なるので、この場合は単なる反復であると考えた方が自然であろう。⁵⁾ 英語で発達した頭韻や脚韻の伝統が、日本語では定着していないという理由から、このような混乱は生じやすいと思われる。

本稿では、「反復」を「音の繰り返し」と広く捉え、頭韻、脚韻に限定せず、単純な音の重なりから、形態素（拘束・自由）や句まで、繰り返されている要素を全体的に検討する。以下、2.1では、繰り返しの機能について Jakobson(1960)に言及し、2.2では、修辞学に於ける反復の分類を紹介する。2.3では韻についての説明がされ、2.4でこの節が要約される。

2.1 Jakobson (1960)

なぞなぞは、日常の言語ではなく、詩的な言語表現との関連から考えるべきである。Jakobson(1960)は、詩的機能がことば自体への志向で生まれると主張している。彼は、Saussure の提案した ‘syntagmatic’ (統合的) と ‘paradigmatic’ (範列的) の関係を詩的機能の説明に適用した。つまり、詩的言語は、‘paradigmatic’ のレベルに関連する項目が ‘syntagmatic’ に移されると考えられる。従って、一般的な言語の ‘syntagmatic’ な連続を無効にし(‘upset’), 普通の言語とは異なるのである。Jakobson(1960:358)は、以下のように述べている。⁶⁾

The selection is produced on the base of equivalence, similarity and dissimilarity, synonymity and antonymity, while the combination, the build up of the sequence, is based on contiguity. *The poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination.* Equivalence is promoted to the constitutive device of the sequence.

選択は等価性（類似と相違，同意と反意）に基づき，結合，つまり記号列の仕組は近接に基づいている。詩的機能は等価性の原理を選択の軸から結合の軸へ投射する。等価性が記号列の構成原理にまで推し進められるのである。

繰り返し現象によって、詩のリズムが創造されるのだが、それは、頭韻、脚韻、の音のレベルだけではない。単語やそれ以上のレベルの繰り返しも平行性(parallelism)を創造する。具体例を上げると、「地獄の沙汰も金次第」という英語の諺を、頭韻と音節構造を考慮に入れて示すと以下ようになる(池上(編), 1985: 149)。

(4) Móněy mákes tě máre tō gó.

上の下線部が含まれる3語は、/m/で始まる頭韻が踏まれ、さらに、強弱のリズムも繰り返されている。この諺と同じような内容を表すなら、‘Gold lets the horse go’でも意味は伝わるかもしれない。しかし、実際には、(4)の表現が選ばれるのは何故であろうか。それは、詩的言語が内容を伝達するためだけのものでないからである。(4)は、頭韻だけでなく、音節構造の等価性のためにも、‘make’という使役動詞を使うことで、文法的に正しくない‘to go’が用いられている。換言すると、詩的な要素を含む言語表現は、内容を伝達するだけでなく、繰り返しのような表現自体にも重点が置かれるのである。

また、Leech(1969:85)は、平行性は、表現と内容の特別な関係を作り上げ、内容を強調する機能があることを次のように述べている: ‘...verbal parallelism says the same thing twice over: the expression hammers home the content.’ (「ことばの平行性は同じことを二度繰り返して言うことである。つまり、表現が内容を銘記させるのである。」)

これまで、英語の例を見たわけだが、日本語の場合はどうであろうか。日本語は、「強弱」ではなく「高低」アクセントが用いられ、また、音節構造も英語に比べるとはるかに単純である。その特質からであろうか、日本語では、伝統的に「押韻」が発達していない。⁷⁾

2.2 反復の分類

ここでは、修辞学での反復の分類を見ることにしよう。『大修館英語学事典』では、反復(repetition)を修辞学の用語の説明の中で、①「音の反復」、②「単語または句の反復」、③「節または思想の反復」、と3分類している。まず最初の分類の①「音の反復」は、以下のように3種類に分けられる。

- (5) i) 頭声反復または頭韻 (alliteration, paroemion)
(同じ音 (字) を反復させる)
例 : to hold with the hare, and hunt with the hound
(敵味方双方と仲良くする)
soon ripe, soon rotten (早く熟すれば早く腐る)
- ii) 母音韻 (assonance)
(広い意味では類音の反復 ; 特に強勢のある音節で同じ母音で異な
った子音を持つ2語間の押韻)
例 : penitence—reticence
- iii) 子音韻 (consonance)
(assonance の反対で子音が響き合う)
例 : great—meat, send—hand

以上から分かることは、修辞学では、基本的に、一種類の音の繰り返しが音の反復であるとみなされている。また、頭韻は反復の一つに分類されているが、脚韻は分類として扱われていない。

次に、②「単語または句の反復」は、以下のように10分類されている。

- (6) i) 前辞反復 (anadiplosis)
例 : Why lived I alas! alas which loved I.
- ii) 首句反復 (anaphora)
例 : Because I do not hope to turn again
Because I do not hope
Because I do not hope to turn
Desiring this man's gift and that man's scope.
—T.S.Eliot, *Ash Wednesday*
- iii) 間歇語句反復 (diacope, corproce) { 1, 2語おきに同一語 (または句) を反復する }
例 : Light, I say! light—Shakespeare, *Othello*
My heart is fixed, O god, my heart is fixed—Psalm
- iv) 普通名詞反復 (diaphora)
例 : Is man so hateful to thee

That are thyself a man?

—Shakespeare, *Timon of Athens*

- v) 首尾同句 (epanalepsis)

例 : Purpose so barr'd, it follows

Nothing is one to purpose

—Shakespeare, *Coliolanus*

- vi) 結句反復 (epistrophe, epiphora)

例 : A fine woman! a fair woman! a sweet woman!

—Shakespeare, *Othello*

- vii) 疊語法 (epizeuxis, dilogy) {同一語を続けて重ねる}

例 : Thou'lt come no more,

Never, never, never, never, never!

—Shakespeare, *King Lear*

- viii) 同根語反復 (polyptoton)

例 : Which harm within itself so heinous is

As it makes harmful all that speak of it

—Shakespeare, *King John*

- ix) 首句・結句反復 (symploce)

例 : Are they Hebrew? so am I. Are they Isralites? so am I.

Are they the seed of Abraham? so am I.

—Shakespeare, *Corinthians*

- x) 類語反復 (tautologia) {同じ内容を同一の語, または類語で繰り返す}

例 : If you have a friend, keep your friend, for an old friend is to be preferred before a new friend, this I say to you as your friend.

上の10分類の中で, viii)「同根語反復」と x)「類語反復」には, 語形が異なる語の間での部分的な繰り返しもあり, それ以外の分類は, 同一の語または, 句の繰り返しである。

最後の分類③「節または思想の反復」は, 以下のように三分類されている。

- (7) i) 強調反復主張(commoratio)---最も主張したい点を絶えず繰り返すこと。

例 : The Merchant of Venice の法廷の場で Shylock が契約を実行するよう

に主張する場面

- ii) 同一思想反復 (exergasia, expolitio) ---同一内容を繰り返すこと。

例: I take thy hand—this hand,

As soft as dove's down and as white as it,

Or Ethiopian's tooth, or the fann'd snow that's bolted

By th'northern blasts twice o'er.

—Shakespeare, *Winter's Tale*

- iii) 同一表現反復 (homiologia) {同じ表現を退屈なくらい繰り返す}

例: He hath wrong'd me; indeed he hath; at a word he hath.

Believe me! Robert Shallow, Esquire, saith he is wronged.

—Shakespeare, *Merry Wives of Windsor*

以上見たように、修辞学では、特に単語・句レベルの反復が詳細に分類されている。本論に関連する反復は、①「音の反復」と ②「単語または句の反復」のすべての分類になる。また、③「節または思想の反復」については、「思想」の反復はなぞなぞには多くはないと思われるが、節が繰り返されることはしばしば起こる。全分類で「思想」の反復以外は、音の反復を伴うという性質を共有していることから、実際に同じ音が繰り返されることが反復の基本的な特徴であると言えるだろう。

2.3 韻について

2.3.1 頭韻 ('alliteration')

池上(1967:17)によると、'alliteration' (頭韻) は、同じ音で始まる語の並列の現象を指し、その例として、下のように格言、比喩、定句が挙げられている。

- (8) 'Money makes the mare to go.' (地獄の沙汰も金次第) [格言]

'as cool as cucumber' (平気の平佐で) [比喩]

'with might and main' (一生懸命に) [定句]

'part and parcel' (一部分) [定句]

次に、『英語学要語辞典』では、頭韻は「同一の子音（ごくまれには母音）が近接した語頭で反復されること」を指すと説明されている。その例として、以下が挙げられている。

- (9) ‘birds and beats’ (鳥と獣)
‘confidence and gowardice’ (自信と臆病)
‘cool as a cucumber’ (落ち着きはらって)
‘solid, so still and stable’(J. Conrad) (どっしりと, とても静かに安定して)

語中の子音反復も頭韻として認められるとして以下の例が挙げられている。

- (10) after life’s fitful fever (人生の発作的な熱病の後で)

また、現代英語の言及では、‘cool as a cucumber’のタイプの成句や直喩が多く、他の例として、‘fit as a fiddle (びんびんして)’ ‘dead as a doornail (完全に死んだ)’がある。このように頭韻を使うことは、口調を良くし、記憶を助ける働きをする。とりわけ、‘and’で繋がれた語で、同音で始まる2語には意味の近似性を生じさせる可能性がある。例えば、「あらゆる生き物」を意味する ‘mice and men’での ‘m’の反復は、2語間の関連性を連想するような「チャイム効果(‘chiming effect’)」があると考えられる。

2.3.2 脚韻 (‘rhyme’)

Rhyme (脚韻) は、行末の音節の母音、または、母音と子音が他の行末で繰り返される現象であり、以下の例で示す通り ‘complete rhyme’ (完全な脚韻) と ‘incomplete rhyme’ (不完全な脚韻) に分類される (池上, 1967:19)。

- (11) Complete Rhyme

- (i) Masculine Rhyme: 行末の音節が強勢のある母音で構成されている。
例: ‘time—rhyme’, ‘loth—both’
(ii) Feminine Rhyme: 行末の強勢のある音節+強勢のない音節。
例: ‘slumber—number’, ‘teeming—dreaming’

- (12) Incomplete Rhyme

- (i) Identical Rhyme: 強勢のある母音と先行する子音とが同一である。
例: ‘sea—see’, ‘look(名詞)—look(動詞)’

(ii) Eye-Rhyme : 母音の音価は違うが綴り字が同じ。

例 : ‘good—mood’, ‘love—move’

(iii) Obsolete Rhyme : 現代英語では異なる音価だが、かつては同じ母音。

例 : ‘join—line’, ‘eye—symmetry’

(iv) Approximate Rhyme : 母音または、子音を伴う場合はその子音、の
いずれか、または両方の音価が異なる。

例 : ‘bell—hill’, ‘ease—peace’, ‘tell—invisible’

不完全な脚韻は、全く同一の発音である組み合わせから、異なる音価であったり、母音一つまたは子音一つだけが同じである場合など、かなり広い範囲で脚韻の可能性を認めているようである。しかし、池上(1967:20)が指摘しているように、不完全韻は、伝統的な韻律論から見ると一種の破格である。

『英語学要語辞典』によると、‘rhyme’は、「音の反復を用いた詩の技巧の一つ。詩行の末において、対応する単語の強勢を持つ最終音節の母音およびそれに続く子音（群）が同一であることをいう」と説明されている。その例として、以下の2例が挙げられている。

(13) (i) ‘Jack and Jill went up the hill.’ (ジャックとジルは丘を登った。)

(ii) ‘Time drives the flocks from field to fold

時が羊の群を野原からおりに追う、

When rivers rage and rocks grow cold’

川は荒れて岩が冷たくなるとき

(W. Raleigh : ウォルター・ローリー)

上の例に従うと、典型的な脚韻とは、語末の母音と子音が同一で、しかもその他の部分で異なる要素が含まれる2語が前提であると理解できる。

2.3.3 英語音節の平行性について

Leech(1969:89)は、英語の2つの音節の間に理論的にどのような平行性があるかを探っている。まず英語の音節の一般的構造形式を、 $C^0\text{-}^3VC^0\text{-}^4$ とし、3つまでの子音の後に母音があり、その後に4つまでの子音群があることを表している。平行性というのは、テキストの要素間で、完全でなく、部分的に対応すれば必ず存在す

ると考えられるので、次の6つの可能性があるとして提案している。以下、下線部分が不変の部分を表し、また、Cは子音一つでなく子音群を示している。

- | | | | | |
|----------|------------|---------------------|-------------------|------------------|
| (14) (i) | <u>CVC</u> | <u>great/grow</u> | <u>send/sit</u> | (‘alliteration’) |
| (ii) | <u>CVC</u> | <u>great/fail</u> | <u>send/bell</u> | (ASSONANCE) |
| (iii) | <u>CVC</u> | <u>great/meat</u> | <u>send/hand</u> | (CONSONANCE) |
| (iv) | <u>CVC</u> | <u>great/grazed</u> | <u>send/sell</u> | (REVERSE RHYME) |
| (v) | <u>CVC</u> | <u>great/groat</u> | <u>send/sound</u> | (PARARHYME) |
| (vi) | <u>CVC</u> | <u>great/bait</u> | <u>send/end</u> | (‘rhyme’) |

これら6つの可能性の中で、最初(14i)と最後(14vi)は、相補的な関係であり、最も重要な「頭韻」と「脚韻」である。また、Leechは、これらの他に別の種類の平行性もあると述べている。例えば、‘good-glad’は、それぞれの子音群が/g-/gl/であり同一ではないが、それでも同一の子音の/g/で始まっている。また‘eyes-bless’の最後の子音は、/z-/s/で異なっているが、調音位置が同じ‘sibilant’（歯擦音）であり、有声音か無声音の違いだけである。つまり、音声的特徴を共有した/d-/t/、/g-/k/と同じ関係にある。このように、Leechによると、頭韻、脚韻以外にも平行性が認められる可能性は数種類以上ある。

2.4 まとめ

なぞなぞを詩的な言語表現との関連から捉え、Jakobson(1960)の「詩的機能は等価性の原理を選択の軸から結合の軸へ投映する」という原理に基づくと、なぞなぞは、内容を伝達する目的と同時に、表現自体に重点が置かれると考えられる。なぞなぞでの繰り返しは、そのような詩的要素であり、また、Leech(1969:85)が述べているように、内容を銘記する働き、つまりメッセージを強調する役割も果たすと考えられる。

次に、修辞学での反復の分類、さらに、頭韻と脚韻について、英語の例での説明、そして、Leechの英語音節の平行性の可能性についても見た。分類はさまざまであるが、基本的に同じ音が繰り返されていることが前提になっている。本稿では、分類することが目的でないので、どのような要素でも顕著に繰り返されている例をすべて反復として扱うことにする。また、韻は、同形の語の繰り返しでなく、必ず異なる語の間での音の繰り返しであると考え、英語の脚韻は、2.3.2で紹介した池上

(1967)の分類で, ‘complete rhyme’ と看做されるものと, ‘incomplete rhyme’ では語彙の異なる ‘identical rhyme’ と ‘approximate rhyme’ (母音または子音のいずれかの音価が異なる例など) に限ることにした。

3. 日本の二段なぞに於ける繰り返し

この節では, 日本の二段なぞ (サンプル数158) にかんする反復を検討する。以下に紹介する各例の後で括弧内になぞの答えが書かれている。また, なぞなぞの最後に言われる「…なあと」は省略してある。3.1では, 音の反復だけが見つけられるなぞなぞを取り上げる。3.2は, 拘束形態素までの繰り返しが使われている例を扱う。3.3では, 自由形態素が含まれるなぞなぞの例を挙げている。「だんだん」など語彙そのものが反復音から成立しているものは省いている。また, 以下の例では, 繰り返されている自由形態素は四角で囲まれている。それ以外の繰り返し (拘束形態素及び音の反復) には, 下線が施されている。下線の種類は, 繰り返しが一組の場合は, 1本の下線が施されている。それ以上の繰り返しが複数ある場合は, 下線を二重線, 太字, 点線の順で表示する。

3.1 音の反復のみ含む例 (11例)

最初に, 意味を表さない音の繰り返しだけが用いられている顕著な例を挙げる。次の11例あり, 一番上の例以外は, 下線部の音を下の段に/ /内で示している。

- (15) (i) ぴしゃりん ぴしゃりん, ぴんぴしゃりん, 孫子のだいまでぴんぴしゃりん。
(流し)
- (ii) 濡れた着物を着て, かわくとぬぐもの。(物干竿)
/n/ /k/ /k/ /k/ /n/ {/n/と/k/の繰り返し}
- (iii) 竹のぎん車にきつちんばつたん。(はた織り)
/Q/ /n/ /Q/ /n/ {促音/Q/と/n/の繰り返し}
- (iv) 池につる橋, だんごちんこ (鉄びん (あるいは, やかん・どびん・きゅうす))
/ŋ...o/ /ŋ...o/
- (v) 四方白壁, なかぴっかり。(行燈^{あんどん})
/ʃi/ /ʃi/
- (vi) 四方白壁, とんぼなし。(豆腐: 福島「トンボ」は入口のこと)
/ʃi/ /ʃi/ /ʃi/

- (vii) 山 から 綿帽子かぶってくるもの。(ゼンマイ)
 /yama//kara/ /wata/ {母音/_a_a/の繰り返し}
- (viii) 六角堂に 小僧独り, お詣りがなきゃ戸が開かないもの。(ホオズキ)
 /rokkakudoo//kozoo/ /o/ /to/ {/o/と/k/と/oo/の繰り返し}
- (ix) 百軒 長屋に 釜一つ。(汽車)
 /hyakken//nagaya/ /kama/ {/a/の繰り返し}
- (x) 返してもかりぬもの。(あいさつ)
 /ka/ /ka/
- (xi) ひとが見ているとみつともなくて, 自分は気持ちがいいもの。
 /hi/ /mi/ /i/ /mi/ /ji/ /ki/ /ii/
 (居眠り) {/i/の繰り返し}

意味を表さない音だけの繰り返しを含む例は、以上のように11例で多いとは言えない。(15i)のように、擬音語だけが2回以上繰り返されるなぞは1例しかなかった。

3.2 拘束形態素('bound morpheme')の繰り返しだけを含む例

次に、自由形態素の反復はないが、拘束形態素の繰り返しが含まれる例を扱う。以下に示すように、全部で35例あり、27例が構文と関連している。

3.2.1 構文を含む例(27例)

興味深いことに、拘束形態素の反復と関連する構文の例が10種類見つかった。次の(16)-(25)で示すように、「～ば～ほど」のように7例もあるものから、「～か、～か」「～たり、～たり」のように1例だけしか例が見つからなかった構文までであった。

(16) 「～ば～ほど」(7例)

- (i) 削れば削るほど大きくなるもの。(ふし穴)
- (ii) 大きくなればなるほど小さくなるもの。(着物)
- (iii) 拭けば拭くほどよごれるもの。(ぞうきん, あるいは黒板ふき)
- (iv) 取れば取るほどふえるもの。(カルタ)
- (v) 挿めば挿むほど長くなるもの。(縄)
- (vi) 大きくなればなるほど着物をぬぐもの。(竹の子)

(vii) 使えば使うほど増えるもの。(借金)

上の例は、正確に記述すると、/～eba/.... /～uhodo/という構文で、動詞の語幹（拘束形態素）が繰り返されている。

(17) 「～は～，～は～（～は～）」（5例）

- (i) 昼間は重なって，夜は並んでいるもの。（雨戸）
- (ii) 上は大水，下は大火事。（風呂）
- (iii) 山は回る，雪は降る，がけっぱたに釘1本。（石うす）
- (iv) 親は竹々，子はレンゲ，花は咲いても実はならぬ。（ミョウガ）
- (v) 上は大火事，下は大水。（ランプ）

(17iii) 以外は、反義語のペア（[昼-夜][上-下][水-火][親-子]）が用いられている点に注目すべきであるし、以下のように、意味とは無関係な音の反復は(17iii)のみ観察される。

(17iii) 山は回る，雪は降る，がけっぱたに釘1本。
/y/ /ru/ /y/ /ru/ {/y/と/ru/の繰り返し}

(18) 「～て，～て」（4例）

- (i) 毎日赤い着物をつけて，口をあけて立っているもの。(ポスト)
- (ii) 1里行って，2里行って，3里めの大火事。(キセル)
- (iii) かわいがられて，なぜられて，お手かけられて，ひざまくら。(三味線)
- (iv) お酒を飲んで，ぶらぶらしていて，可愛がられるもの。(ヒョウタン)

(19) 「～で，～で」（3例）

- (i) 下でぶらんこ，上でかけっこ。(柱時計) {/ko/の脚韻も見られる。}
- (ii) 目でみないで手でみるもの。(湯加減)
- (iii) 浅間山でふかされて，^{うすい}碓氷峠でこづかれて，めんば川原で腹切るもの。(餅)

(19)は、「～で，～で」以外の反復として、(19i)では/ko/、(19ii)では、受け身の語尾 (/rete/) が繰り返されている。

(20) 「～ても、～ても」 (2例)

- (i) あたっ ても あたっ ても 痛くないもの。(こたつ)
 (ii) 切っ ても 切っ ても 切れないもの。(水, あるいは空気)

(20)の例では、「ても」だけでなく、動詞の語幹も繰り返されている。(20ii)は、「切る」の語幹(‘kir-’)が3回も繰り返されている。

(21) 「～の、～の」 (2例)

- (i) 家のうちの憎まれるもの。(藁^{わら}だたき石)
 (ii) 針屋の皮屋の洗屋の隣のうまいもの。⁸⁾ (クリ)

上の2例は、格助詞「の」の繰り返しだけでなく、最後の名詞が「もの」なので、音的に/no/が反復されている。

以下は、1例だけが確認された構文である。次の例は、「～か、～か」という構文で、助詞「か」の反復に加えて、//で示すように音的な繰り返しが見られる。

(22) 「～か、～か」 (1例)

- くるみの木の下で、おまえそちらか、おれこちらか、と言って別れて逢うもの。
 /k/ /o//k//o/ /o/ /o/ /k//o/ /o/ /k/ /o/
 {/k/と/o/の繰り返し}

(23) 「～たり、～たり」 (1例)

- 行ったり来ったり、きなこのごっそう。(ノコギリ)

(24) 「～や、～や」 (1例)

- 頭痛や、尻痛や、早く世が明けてくれるといいな。(しんばり棒)

(25) 「～が、～が」 (1例)

- 目が3つで、足が6本。(馬に乗った丹下左膳)

以上、構文と関連する拘束形態素の繰り返しの27例をみた。これらは構文が違うだ

けではなく、反復されている部分が異なる。即ち、(16)の例は語幹が繰り返されているが、(17)---(25)は、構文自体が拘束形態素として反復している。その中で、(20)「～ても、～ても」は、構文だけでなく、語幹も繰り返されているので、拘束形態素の反復部分が一番多い。

3.2.2 構文を含まない例 (8例)

拘束形態素の繰り返しを含み、構文と関連の無い例は、以下8例である。

- (26) (i) お竹さんがお縄でしばられて、泥でうめられたもの。(壁)
 {接頭辞「お」と受動形「られ」の繰り返し}
- (ii) きさま、のりさま、かみさま。(障子)
- (iii) 竹造どんさ木造どん婿にいったもの。(自在鉤の鉤づつ)
 かぎ かぎ
- (iv) 頭もなく手もなくて、2本足で歩くもの。(竹馬)
- (v) 頭をたたかれないと役に立たないもの。(釘)
- (vi) いくら解いても解けないもの。(題のない謎)
- (vii) 12人のお客様にお酌とり2人。(時計)
- (viii) かさをかぶっているのに、いつもずぶぬれになっているもの。(クラゲ)

3.2.3 拘束形態素の繰り返し：まとめ

以上、自由形態素の反復は含まずに、拘束形態素の繰り返しだけを含む例を見た。例文は、全部で35例あり、その内、27例が構文と関連することが分かった。従って、拘束形態素の繰り返しの例で、構文と関係する割合は、7割以上である。

3.3 自由形態素 (‘free morpheme’) を含む、句、節等の繰り返し

自由形態素の繰り返しを含む例を見ていく。全部で30例あり、その内、22例が構文と関連している。以下の例には、自由形態素だけでなく、音や拘束形態素の繰り返しが含まれることもある。

3.3.1 構文を含む例 (22例)

拘束形態素の例と同様に、自由形態素でも構文と関連する反復の例が9種類見つけた。「～時(に)、～時(に)」という構文は7例あったが、他の構文で3例以上のものはなかった。以下に、見つけられた構文と例を挙げることにする。

(27) 「～時 (に), ～時 (に)」 (7例)

- (i) 居る時戸を閉めて, 居ぬ時開けとくもの。 (厩^{うまや})
- (ii) 寒い時に熱く, 暑い時にさむいもの。 (ストーブ)
- (iii) いる時に帽子をとり, いない時に帽子をかぶるもの。 (万年筆)
- (iv) 通る時に戸を閉めて, 通らない時に戸をあけるもの。 (踏切り)
- (v) いる時ならず, いない時いるもの。 (風呂桶のふた)
- (vi) 居ない時居て, 居る時居ないもの。 (留守番)
- (vii) 食う時に食わぬもの, 食わぬ時に食うもの。 (魚釣りの弁当)

上の構文は、構文自体に「時 (に)」という自由形態素の繰り返しが含まれている。また同時に、一対か二対の反義語 (例: [居る-居ぬ] [閉める-開ける] [寒い-暑い]) も含まれている。反義語が [肯定-否定] の場合 (例: [通る-通らない] [食う-食わぬ]) は、語幹が繰り返されているために、構文と語幹という2種類の繰り返しが生じていることになる。特に興味深いなぞなぞである(27vii)は、「時」、「もの」という名詞が繰り返されているだけでなく、「食う」の語幹‘ku-’が4回反復されている。その上、格助詞の「に」、動詞語尾の「う」「わぬ」も繰り返されて、順序を入れ替えて、総ての要素が反復されている。

以下の構文は、構文自体は拘束形態素であるが、その他に、四角で囲まれた自由形態素の反復や、下線部の施された動詞の語幹等、拘束形態素の反復も含まれている。

(28) 「～て～て」 (3例)

- (i) 一くり, 二くり, 三くり峠の節も抜いて, スッペンボンと吹かれて, ウンデンデックリ。 (火吹き竹) { 群馬: 三国峠をかけたと思われる。}
- (ii) 青山越えて, 赤山越えて, 中に黒ん坊。 (スイカ)
- (iii) 金山越して, 竹山越して, 金山越して, 火事ぼうぼう。 (キセル)

(29) 「～の, ～の」 (3例)

- (i) 鉄の家に入り, 木の家に入り, 瀬戸物の家に入り, 二本橋を通過って暗い道を行くもの。 (ご飯)
- (ii) 5人の兄弟で3番目の兄弟が一番大きいもの。 (指)

- (iii) しまん しまんの田の中によしで造った家1つ。 (八幡太郎義家)
{四幡と四幡で、八幡になると考えられる。}
- (30) 「～が, ～が」 (2例)
- (i) 大きいものがはいれて, 小さいものがはいれないもの。 (蚊帳)
(ii) 先は白馬, 中が赤馬, あとが黒馬。 (山火事)
- (31) 「～を, ～を」 (2例)
- (i) お前そっちを回る, わたしはこっちを回る。 (桶のたが)
(ii) 8人で鉢巻きをして, あの山を越え, この山を越えているもの。
(俵あみ)
- (32) 「～に, ～に」 (2例)
- (i) たんたん垂木に竹垂木, 油障子に水はりこ。 (傘)
{音は、「たん」と「垂木」の繰り返しで、/ta/が4回反復している。}
(ii) 金の丸太に綱つけて, 綱を日数に丸太を引くもの。 (針)
- (33) 「～は, ～は」 (1例)
朝4本足, 昼は2本足, 夜は3本足。 (人の一生)
{「足」と、助数詞の「本」も繰り返されている。}
- (34) 「～ば, ～ば」 (1例)
あんさあるけば 穴になる, 姉さあるけば 縞になる。 (火箸と灰ならし)
{「あんさ」と「姉さ」は、/a-sa/の繰り返しである。}
- (35) 「～と, ～と」 (1例)
1つ字を書くと赤になり, 2つ字を書くと白になるもの。
(ち: 血と乳になるから)

以上、自由形態素の反復を含むなぞなぞには、9種類の構文を含む例が22例見つかった。そのうち7例が「～時 (に), ～時 (に)」という構文で、この7例すべてに反義語が使われていた。

3.3.2 構文を含まない例 (8例)

次に自由形態素の反復を含むなぞなぞで、構文とは関連のない例を挙げる。全部

で8例が見つかったが、その内3例(36ii, iv, vi)は、自由形態素だけでなく拘束形態素の繰り返しが含まれている。

- (36) (i) だんだん^白に白^白。 (障子)
 (ii) 最初黒^くて、^次に赤^く、^次に^は白^くなるもの。 (炭)
 {「く」も繰り返されている。}
 (iii) 木^{だん}、竹^{だん}、からくり^{だん}、中は菩薩の花踊り。[だん=段]
 {唐箕(=^{とうみ}穀物に混ざった籾殻等を除去する農具)}
 (iv) 吊^つたりや、吊^天井、張^つたりや、張^天井、これをとくにはお天道さまでなければ溶けないもの。 (氷)
 (v) 山のほうから^{おい}で^{おい}でしているもの。 (ススキの穂)
 (vi) ¹週間に¹度赤い着物を着るもの。 (日めくり)
 (vii) 弟は¹回^り、兄さん¹²回^り。 (時計の針)
 (viii) 木^道、金^道、からかね^道、急いで走る奉公人。 (鉄砲)

3.3.3 自由形態素の繰り返し：まとめ

以上、自由形態素の繰り返しを含む例を見た。総数30例中、22例が構文と関連していることが分かった。また、構文と関係がある例には、自由形態素だけでなく、音や拘束形態素の繰り返しが含まれることも明らかになった。これは、構文の要素が助詞などの拘束形態素である場合が多いからである。

3.4 日本の二段なぞ：繰り返しの特徴

3.1で扱った音の反復だけのなぞなぞは11例あった。3.2で拘束形態素までの繰り返しの例を検討したが、構文として成り立っているなぞは、27例で、構文でない場合は8例見つかった。3.3は、自由形態素が含まれるなぞなぞの例を扱った。22例が構文を含み、8例は構文を含まなかった。従って、サンプル数158のうち、76例(48.1%)に反復があり、さらに反復表現が何らかの構文に含まれた例は、49例(約31.0%)であった。つまり、データの約3割に構文と関連する反復表現があることが分かった。

4. 英語のなぞに於ける繰り返し

この節では、英語(イギリスとアメリカ合衆国)のなぞを扱う。検討するサン

ルの総数は130である。以下に紹介する各例の最後の括弧内には、なぞの答えが書かれている。4.1では、音だけの反復が見つけれられるなぞなぞを取り上げる。4.2は、拘束形態素までの繰り返しがいわれている例を扱う。4.3では、自由形態素の反復が含まれる例を挙げている。また、前節と同様に、以下の例では、自由形態素が繰り返される時は四角で囲まれ、拘束形態素、または音の繰り返しだけの場合は下線が施されている。下線の種類は、繰り返しが一組の場合は、1本の下線が施され、それ以上の繰り返しが複数ある場合は、下線を二重、太字、点線の順で示される。

4.1 音だけの繰り返し

最初に、形態素を含まない音だけの反復が見つけられた例を取り上げる。1種類の韻だけ含む例は、4.1.1で、2種類の韻は4.1.2で見ることとする。繰り返されている音は、なぞなぞの最後の / / の中で示すこととする。

4.1.1 1種類の韻を含む例 (8例)

- (37) (i) What changes a lad into a lady? /l/, /l/
野郎を淑女に変えるのなかに。(Yという字: the letter y)
- (ii) What has a head, /h/ 頭があっても,
But no hair? /h/ 髪のないものは。(ピン: pin)
- (iii) Goes all over the fields and leaves a white cap on every stump. /i:/, /i:/
野原のどこまでも行き渡り、どの切り株にもみな白い帽子を残す。
(雪: snow)
- (iv) Something has an ear and cannot hear. /iə/, /iə/
耳があっても聞こえないもの。
{トウモロコシの実: ear of corn: 'ear' は、「耳」と「実」を表す。}
- (v) Have a teeth, /i:/ 歯があっても,
But cannot eat. /i:/ 何も食べられないもの。(のこぎり: saw)
- (vi) I'm called by the name of a man, ぼくは男の名前で呼ばれているけど,
Yet am as little as a mouse; /áus/ ハツカネズミのように小さいんだ。
When winter comes I love to be 冬が来ると、赤い胸(target)をして,
With my target near the house.⁹⁾ /áus/ 民家のそばにいたいんだ。
(こまどり: robin)
- (vii) A dish full of all kinds of flowers, /áuərz/ 深皿にいろいろな花が一杯,

You can't guess this riddle in two hours. /áuərz/

このなぞは2時間かけてもわかるまい。(つらら : icicle)

(viii) Black within and red without, /áut/ 内側は黒い, 外側は赤く,

Four corners round about. /áut/ 四隅は丸い。(煙突 : chimney)

上の8例の中で, 頭韻 ('alliteration') は, 2例((37i), (37ii))で, 母音だけの繰り返しである 'assonance' は, 2例((37iii), (37v)), その他の5例が脚韻である。(37v)の例は, 対比する語は, 'teeth'/tí:θ/と 'eat'/í:t/なので, /i:/だけが同じで, 最後の子音が異なる。しかし, 子音の 調音位置が, /θ/は歯で, /t/は歯茎部であり, 非常に近い関係にある。従って, この例は, 不完全な脚韻としてみなすこともできる。すると8例中5例が脚韻となり, 音反復だけが見つけられる例では, 主に脚韻が使われている傾向にあると言えよう。

4.1.2 2種類の韻を含む例 (8例)

(38) (i) Four fingers and a thumb, /f/, /f/, /ʌ/ 指は5本あるけれど,
Yet flesh and bone have I none. /f/, /ʌ/ 骨も肉もない私。(グローブ : glove)

(ii) My father stay here /híər/ おやじはここに留まって,
And he grumble all over the world, そこいら中にとどろかす,
Hear him. /híər/ /h/ おやじの声を聞いてごらん。(雷 : thunder)

(iii) Green head, yellow toes, /óuz/ 緑の頭で, 黄色い足,
If you don't tell me this riddle, このなぞ解かねば, /r/
I'll ring your nose. /r/ /óuz/ 鼻輪をはめてやる。(アヒル : duck)

(iv) What goes over hill and vale, /éil/ 丘を越え, 谷を下り,
Makes a noise, but never leaves a trail? /n/ /éil/
音を立てても通った跡を残さないもの。(風 : wind)

(v) Round and deep and good to keep, /í:p/, /í:p/ 丸く深くもちが良い,
Because you use it once a week. /í:/ 週1回使うもの。(浴槽 : bathtub)
{/í:/は3回繰り返されている。}

- (vi) I have long legs, /é/ 脚長で,
But short thighs, /áiz/ 曲がった股,
A little head, /é / 小さな頭
And no eyes. /áiz/ の目なし君。 (火箸 1 対 : a pair of tongs)
{ 1, 3 行目の/é/, 2, 4 行目の/áiz/の繰り返し }
- (vii) A shoemaker makes shoes without leather /édær/ 皮革を使わず,
With all the four elements put together /édær/ 火, 水, 土と空気から,
Fire, Water, Earth, Air, /éær/ 靴づくりする職人さん,
And every customer takes two pair. /éær/ どの客も必ず 2 足買って行く。
(馬蹄工 : shoemith)
- (viii) Formed long ago, yet made today, /éi/
ずっと昔につくられたが, 今日こしらえた。
Employed while others sleep; /i:p/ 他人が眠っている間に働き,
What few would like to give away, /éi/ 誰も捨てたがらないし,
Nor any wish to keep. /i:p/ そのままに放っておきたがらない。
(ベッド:bed) { 1, 3 行目---/éi/, 2, 4 行目---/i:p/ }

以上2種類の韻の8例を見たが、2種の韻が頭韻と母音韻から成る(38i)と、1種の頭韻と同音異義語の繰り返しが見られる(38ii)以外で、脚韻が使われていることに注目すべきである。

4.1.3 音だけの繰り返し : まとめ

4.1.1-4.1.2の例で確かめられたように、形態素の繰り返しがない韻だけの繰り返しが見られる例で、16例中11例に脚韻が観察された。従って、音の反復では、頭韻や母音の繰り返しは少数で、脚韻が多いことが明らかになった。

4.2 拘束形態素 ('bound morpheme') の繰り返しだけを含む例 (2例)

次に、自由形態素の反復がなく、拘束形態素の反復が見られた例を扱う。例の数は少なく、拘束形態素は、'less'だけであり、以下2例だけが挙げられる。

- (39) (i) Bloodless and boneless /b/, /b/ 血なし骨なし,
And goes to the fell footless. /f/, /f/ 足なしで高原を旅する男。
(カタツムリ : snail)

- (ii) White bird featherless 羽のない白い小鳥が,
 Flew from Paradise, 天から飛んでやってきて,
 Pitched on the castle wall; /ó:l/ お城の壁におっこちた。
 Along came Lord Landless, そこを通った失地王, /l//l/
 Took it up handless, 手も使わずに取り上げて, /h/
 And rode away horseless to the King's hall. /h//h//ó:l/
 馬にも乗らず, 王宮の白い広間へ駆け去った。

(雪, 太陽光線 : snow, sunbeam)

上で, 最初の例には, ‘less’ の反復に加えて, 2種類の頭韻/b/, /f/もあることに気づく。また, 2番目の例には, 頭韻が, /l/と3回繰り返されている/h/があり, さらに/ó:l/という脚韻も含まれている。

4.3 自由形態素(‘free morpheme’)の繰り返し

ここで扱う例は自由形態素の反復だけでなく, 音や拘束形態素の繰り返しが含まれる場合もある。例数が多いので, 韻も含まれるかどうかで分類し検討する。まず, 韻が使われていない例を取り上げ, 4.3.1では, 1語だけ繰り返されている例, そして4.3.2では, 2語以上繰り返されている例を考える。次に, 自由形態素の繰り返しだけでなく, 韻も含む例をみる。まず4.3.3では, 1種類の韻を含み, 語の反復があるもの, 4.3.4では, 2種類の韻を含み, 語の反復がみられるもの, 4.3.5では, 3種類の韻と語の繰り返しが含まれる例を紹介する。また以下の例では, 冠詞は語と看做さないことにする。

4.3.1 (韻を含まず) 1語だけが繰り返されている例(9例)

最初に, 韻が使われていないなぞなどで, 一つの語彙が繰り返されている例を以下でみることにする。

- (40) (i) What's the difference between an Indian Elephant and an African Elephant?
 インド象とアフリカ象のちがいは。(約3000マイル : about 3,000 miles
 [differenceをへだたりの意に介している])
- (ii) What is that with one leg and one eye?
 1本足の1つ目小僧ってなあに。(針 : needle)

- (iii) What **goes** up an' never **goes** down?
上っていくが、下ることのないもの。(煙 : smoke)
- (iv) **It** goes all over hills and plains, 丘や平地のいたる所に行くけれども,
But when **it** comes to a river, **it** breaks its neck.
川に来ると、首を折って死んでしまうもの。(道 : path)
- (v) Come up **and** let us go: 上がれ, さあ行こう。
Go down **and** here we stay. 下がれ, さあ停泊だ。(錨 : anchor)
- (vi) What belongs to **yourself**, yet is used by everybody more than **yourself**?
自分のものだが自分より他人^{ひと}に、よく使われるもの。(自分の名前 : your name)
- (vii) Black **and** white **and** red all over. クロ, シロでアカ (字) だらけ。
(新聞 : newspaper)
- (viii) What has feet **and** legs **and** nothing else?
すねと足しかないもの。(長靴下 : stockings)
- (ix) The land **was** white, 白い地に,
The seed **was** black; 黒い種子。
It will take a good scholar なぞ解きしたきゃ,
To riddle me that. 学者先生連れてこい。(本 : book)

上の例から、繰り返されている回数が3回である(40iv)以外は、2回の反復であることが分かる。一般に3回以上の反復は多数でないと推測される。また、構文と言えるかどうか分からないが、接続詞の‘and’が多く使われていることに注目すべきであろう。名詞の間に使われている例(‘N and N’)が5例(40i, ii, iv, vii, viii)あり、動詞の間に使われている例(‘V and V’)は2例(40iii, v)ある。

4.3.2 (韻を含まず) 2語以上繰り返されている例 (13例)

次に、韻が使われていないなぞなぞで、二つ以上の語彙が繰り返されている例を検討する。以下13例が挙げられる。

- (41) (i) Two people sat down 2人の人が丸太ん棒に
on a log to rest. 座って休んだ。
One **was** the father of the **other** 一方は他方の父親だが,
but the **other** **was** not his son. 他方は本人の息子ではない。

What kin were they? 一体この2人はどんな関係?

(父と娘 : a father and a daughter)

- (ii) **Four legs** up **and** **four legs** down, 上に4本足下に4本足,
Soft in the middle **and** hard all 'round. 中は柔らかく^{まわり}周囲は硬いもの。
(ベッド : bed)
{この例は、繰り返しを示す括弧に入れた部分以外は、反義語ペア
(‘up—down’, ‘soft—hard’, ‘in the middle—all ‘round’) が成立している。}
- (iii) What **eats** **and** **eats** **and** never get full? 食べても食べても一杯にな
らないもの。 (腸詰用ひき肉器 : sausage-grinder)
- (iv) It has a head **like a cat**, 猫のような頭と,
Feet **like a cat**, 猫のような足と,
A tail **like a cat**, 猫のような尻尾がありながら,
But it isn't a **cat**. 猫ではない。 (子猫 : kitten)
- (v) I have an apple **I can't** cut, a blanket **I can't** fold, and so much money
I can't count it. ぼくのリンゴは割れない, ぼくの毛布はたためない,
お金がありすぎて数えられないほどさ。 (月, 空, 星 : moon, sky, stars)
- (vi) It first walks **on** four **legs**, **then** **on** two,
then **on** three **legs**.
初め4本足で歩き, つぎに, 2本足で歩き, そのあと3本足で歩くもの。
(人間 : man) {‘on’ が3回, ‘legs’ と ‘then’ が2回繰り返されている。}
- (vii) As **I** went over London Bridge, ロンドン橋を渡っていくと,
I met a heap of people, 群衆に出会った。
Some were nick, **some were** brown, ある者は黒く, ある者は褐色で,
And **some were** the color of tobacco. ある者はタバコ色。
(ハチ : bees)
- (viii) **If you** feed **it**, **it will** live, 餌をやったら, 生きているが,
If you give **it** water, **it will** die. 水をやたら, おしまいさ。(火 : fire)
{‘live—die’ という反義語が最後で対比されている。}
- (ix) What goes **with a coach**, 馬車とでかけ,
And comes **with a coach**? 馬車とやってくる。
And the **coach** can't go without it. つまり馬車のお供というわけ。(騒音 : noise)
- (x) **The man who** made **it** 作った人は

did not want it; 欲しがらない。

The man who bought it 買った人は

did not use it. 使わない。

The man who used it 使った人は

did not know it. 後存知ない。(靴: shoe)

(xi) **If he come, he no comes**, 来ると, ない。

If he no comes, he comes. 来ないと, ある。

(カラスとトウモロコシ: crow and corn---もし, カラスが来るなら, トウモロコシはなくなるが, カラスが来ないなら, トウモロコシはある。)

(xii) **On the hill there's a green house**, 丘の上に緑の館,

In that green house there's a white house, その中には白い館

In that white house there's a red house, その中には赤い館

In that red house there are lot of little black and white man.

その中には白いと黒の小人が大勢住んでいる。(スイカ: watermelon)

(xiii) **Sometimes with a head**, 頭があることもあり,

Sometimes with no head at all, ないこともあり

Sometimes with a tail, 尾のあることもあり,

Sometimes with no tail at all. ないこともある。

What am I? さて私はなんでしょう。(かつら: wig)

{1---4行目まで **Sometimes with** が繰り返され, 2行目と4行目が

'no...at all' 1, 2行目が 'head', 3, 4行目が 'tail' の繰り返し。}

上の13例を観察すると, 4.3.1でみたような一語の繰り返しの傾向とは異なった性質を呈している。まず, 複数の語ということで, 句や文としての反復が見られ, その場合に3回以上繰り返される例があった。例えば, (41iv)は 'like a cat', (41v)では 'I can't', (41vi)では, 'on....(legs)', (41vii)の 'Some were...' がそれぞれ3回反復されている。また, (41x)は, 'The man who...it', (41xii)は, 'In that house there's a....house' が3回繰り返され, (41xiii)では, 'Sometimes with' が4回繰り返されている。複数の語が繰り返されている例では, 反復部分の方が, 反復していない部分より多いことがある。特に, (41xi)---(41xiii)は, ほとんどの語が反復されている。

構文にかんしては, 際立ったものは見つからなかったが, 4.3.1でも観察された

接続詞の ‘and’ が幾つかの例(41ii, iii, v, ix)で使われている。また, (41viii)と(41xi)の構文が ‘if..., S’ として, 同じ形式として繰り返されているだけでなく, 内容に関しては, 反義的であり, 表現全体として類似性が認められる。

4.3.3 1種類の韻+自由形態素の繰り返し (15例)

次に韻を含む自由形態素の反復の例をみる。最初は, 1種類の韻が見つけられた15のなぞなどである。

- (42) (i) **A riddle**, **a riddle**, as I suppose, /óuz/ なぞなぞなあになぞなあに,
A hundred eyes and never a **nose**. /óuz/ 目は百あっても鼻はなし。
(^{ふるい}篩, またはジャガイモ: sifter, or potato)
- (ii) **A riddle!** **a riddle!** /idl/ なぞだ, なぞだ,
A hole in the **middle!** /idl/ 中は空洞。 (ドーナツ: doughnut)
- (iii) **Hitty Titty** upstairs, /stéærz/ ヒッティー・ティッティーは, 屋上に,
Hitty Titty downstairs, /stéærz/ ヒッティー・ティッティーは, 階下に
You touch **Hitty Titty**, ヒッティー・ティッティーは, さわったら,
Hitty Titty bite you. ヒッティー・ティッティーに, 刺されるぞ。
(すずめばち: wasp)
- (iv) **Brick** upon **brick**, れんがの上^にれんがを重ね,
Hole in the **middle**, /idl/ 中は空洞。
Guess that **riddle**, /idl/ このなぞ解けたら,
I'll give you a **fiddle**. /idl/ バイオリンをくれてやる。(煙突: chimney)
- (v) Though **I** dance at a **ball**, /ó:l/ 舞踏会で踊ってはいるけれど,
I am nothing at **all**. /ó:l/ 私の存在は無に等しい。
What am **I**? 一体, 私はなんでしょう。(影: shadow)
- (vi) When first **I** appear **I** seem **mysterious**, /íæriəs/
一見^{したい}が知れぬと思われても,
But when **I am** explained **I am** nothing **serious**. /íæriəs/
説明されれば何^ということのない私。(なぞなぞ: riddle)
- (vii) It **run**s all **day**. 一日中走^{って}も, /éi/
But never does **run** away. 逃げ出さないもの。/éi/ (柱時計: clock)
- (viii) **What is** that **which is** too much **for** one, /hw/, /hw/

ひとりではもてあまし、

enough for two, but nothing at all for three? ふたりで充分, 3人ではおじゃん。

(秘密 : secret)

- (ix) As I was going 'cross London Bridge, ロンドン橋を渡っていたら,
I met a car of guinea pigs. 車一杯に積まれたモルモットに出会った。
They were kicked; they were hacked; /ækt/ けられて, めった切りされ,
They were all yellow-backed. /ækt/ みんな黄色い背をしていた。
(オレンジ : oranges)
- (x) My belly is wood. おいらの腹は材木,
My sides is leather. /édər/ おいらのわき腹は皮革。
My nose is cold iron, おいらの鼻は冷たい鉄,
And useful in cold weather. /édər/ 寒い日に役に立つ。(ふいご : bellows)
- (xi) Around the rick, around the rick, /ik/ 麦わら積んだその山に,
And there I found my Uncle Dick /ik/ 見つけたぼくのディック叔父さん。
I screwed his neck. /k/ 首をひねって
And left his body lying. 死体を寝かせて放つといた。
(ビール瓶 : beer bottle ['screwed his neck' は「コルクの栓を抜いた」の意もある]) {'rick' 'Dick' 'neck' は/k/で終わり, 'rick' と 'Dick' は/ik/の脚韻がある。}
- (xii) A large theatre has two window upstairs, /stéərz/ 大劇場の2階には窓2つ,
two window downstairs, /stéərz/ 1階にも窓2つ,
a large door with white people, a red stage. What is that?
白人が並んだ大きな扉と赤い舞台が1つずつ。(人の頭 : a person's head)
- (xiii) Round as an apple, リンゴのように丸くって,
Busy as a bee; /i:/ ミツバチのようにせわしなく,
The prettiest things 何よりかわいい,
That ever you see. /i:/ 馴染みの娘(こ)。 (腕時計 : watch)
- (xiv) First you see me in the grass, ぼくは原っぱにいる,
Dressed in yellow gay; /éi/ 初めは派手な黄色の衣装を付け,
Next I am in dainty white, 次にはきれいな白衣に替え,
Then I fly away. /éi/ それから飛去っていく。(タンポポ : dandelion)
- (xv) There was a little green house; 小さな緑の館があったとき。

And inside the little green house	その小さな緑の館の中には、
There was a little brown house;	小さなトビ色の館があったとき。
And inside the little brown house	その小さなトビ色の館の中には、
There was a little yellow house;	小さな黄色い館があったとき。
And inside the little yellow house	その小さな黄色い館の中には、
There was a little white house;	小さな白い館があったとき。
And inside the little white house	その小さな白い館の中には、
There was a little sweet heart. /h/	小さな甘い心 <small>しん</small> があったとき。 (クルミ : walnut)

{最後の行以外，4色の語彙が繰り返されている。また最後の行の‘heart’は，8行目までの‘house’と/h/の頭韻を踏んでいる。}

以上15例は韻が含まれているが，よく観察すると，2例(42viii, xv)以外は，脚韻が含まれている。押し並べて，脚韻は頭韻に比べて多用される傾向があることが確認できた。また4.3.2で指摘したように，句や文としての反復では，3回以上の繰り返しが見つかった。例えば，(42ix)の‘They were...’は3回，(42x)の‘My ... is ...’も3回，(42iii)の名詞句‘Hitty Titty’は4回反復されている。最後の例(42xv)では，‘There was a ... house’が5回，‘And inside the little... house’が4回繰り返されている。構文に関しては，特に目立ったものは，見つからなかった。しかし，等位接続詞の‘but’と‘and’の使用がある程度の頻度(42vi, vii, viii, x, xi, xv)で観察された。

4.3.4 2種類の韻 + 自由形態素の繰り返し (11例)

ここでは，2種類の韻を含む自由形態素の反復の例をみる。以下11のなぞなどを検討する。

- (43) (i) It stands on its one leg with its heart in its head. /é, /é/, /h/, /h/
頭の中に心臓ハートがあって，1本足で立っているもの。(キャベツ:cabbage)
- (ii) Riddle me, riddle me, what is that? /ét/ なぞなぞなあになぞなあに，
Over the head and under the hat? /h/, /h/, /ét/ 頭の上で帽子の下。(頭髪:hair)
- (iii) Guess a riddle now you must, /ást/ このなぞ，解け解けすぐに解け，
Stone is fire, and fire is dust, /ást/ 石は火に，灯は灰に，

Black is red, and red is white; /áit/ 黒は赤に, 赤は白に,
Come and view the wondrous sight. /áit/ この不思議な光景を見においで。
(石炭 : coal)

- (iv) Thirty white horses 真っ赤な丘に
Upon a red hill, /íl/ 30頭の白い馬,
Now they stamp, /áemp/ 足踏みしたり,
Now they champ, /áemp/ むしゃむしゃしたり, /áemp/
Now they stand still. /íl/ じっとそのまま立ち尽くしたり。(歯と歯茎 : teeth)
- (v) Humpty Dumpty sat on a wall. /ó:l/ ずんぐりむっくり, へいの上
Humpty Dumpty got a great fall. /ó:l/ ずんぐりむっくり, まっさかさま。
All the king's horses, all the king's men, /én/ 王様の馬も家来もそう総動員,
Could not put him together again¹⁰. /én/ うんとこどっこいお手上げだ。
(卵 : egg)

- (vi) It grows in the woods; /óuz/ 森の中で育ち,
It bellows in the towns. /ouz/ /áunz/ 街の中でうなる。
If you guess this riddle このなぞ解けたら, ,
I'll give you five pounds. /áundz/ 5ポンドやるよ。(バイオリン)
- (vii) As red as an apple. /pl/ リンゴのように赤くって,
As round as a ball, /ó:l/ まりのように丸くって,
Higher than the steeple, /pl/ 教会の尖塔や風見鶏よりも,
Weathercock and all. /ó:l/ 何よりも高い所にあるもの。(太陽 : the sun)
- (viii) Two brothers we are, /b/ ぼくらは双子,
Great burden we bear, /b/, /b/ 重い重い負担に耐え,
We're sorely oppressed, /ést/ ひどく重荷に苦しめられ,
Full all the day, 1日中ぎゅうづめで,
An' empty at night, 寝るときだけが,
When we go to rest. /ést/ すっからかん。(靴 : pair of shoes)
{反義語のペアが 'full-empty' 'day-night' の2組ある。}

- (ix) Four stiff-standers, 棒立ち男が4人, /áendərz/
Four dilly-danders, ぶらぶら者が4人, /áendərz/
Two lookers, のぞき屋が2人, /úkərz/
Two crookers, ペテン師が2人, /úkərz/

And a wig-wag. ルンペンが1人では。(雌牛：cow)

- (x) **I**m in everyone's **w**ay, /éi/ ぼくは通り道にいるけれど,
 Yet no one **ll** **s**top: /táp/ 通せんぼなんかしてないよ。
My four arms in every **w**ay **p**lay, /éi/, /éi/ 4つのお手手は自由自在,
 And **m**y head is nailed on at the **t**op. /táp/ 頭のとっぺん釘付けさ。

(回転式木戸：turn-stile) { 1, 3行目---/éi/, 2, 4行目---/táp/ }

- (xi) Down under the **h**ill **t**here was a **m**ill, /íl/ 丘の麓に水車小屋1軒,
In the **m**ill **t**here was a **c**hest, 水車小屋1軒に大きな箱1竿,
and **i**n the **c**hest **t**here was a **t**ill, /íl/ 大きな箱に引き出し1つ,
In the **t**ill **t**here was a **c**up, /p/ 引き出しコップ1個,
And **i**n the **c**up **t**here was a **d**rop. /p/ コップにしずく1滴,
No man **c**ould **d**rink **i**t, 飲めもしないしずくだが,
No man **c**ould **e**at **i**t, 食べもしないしずくだが,
No man **c**ould **d**o without **i**t. これなしには生きられない。

(血液：the heart's blood)

{ 1, 3行目は脚韻/íl/, 4, 5行目は子音/p/だけ同じである。また, 1, 3行目の脚韻に関わる 'mill' と 'till' は, 次の行で繰り返されている。}

上の11例から容易に気づくことは, (43i)を除くすべての例に脚韻が見つかることである。また, 語句や文等が3回以上反復されているものがあつた。例えば, (43iii)は, '... is ...' が3回繰り返され, (43iv)は, 'Now they...' の繰り返しが3回見られる。特に, (43xi)は, ほとんどの語彙が繰り返されていて, 'In the ... there was a ...' が4回, それに続く 'No man could...' が3回反復している。一語が3回以上反復している例は, (43viii)で, 'we' が4回繰り返されている。また, 構文と関連する特徴としては, 'and' が6例(43ii, iii viii-xi)で使用されていることが分かつた。

4.3.5 3種類以上の韻+自由形態素の繰り返し (6例)

3種類以上の韻を含む例は, 2種類以下の韻を含む例と比べて数は減るが, 今回のデータから以下6例が見つかつた。その中で, 最後の2例が韻の数が4種で一番多い。その他の例では, 3種類の韻が使われている。

- (44) (i) **B**ig **i**n the **b**ottom, /b/, /b/ 下は大きく,

- Little at the top, /áp/ 上は小さく,
something in the middle 中では回る,
go flippety-flop. /fl/, /fl/ (/áp/) ばたばたと。(攪乳器 : churn)
{2行目と4行目は/áp/と韻を踏んでいる。4行目は/fl/の繰り返し。}
- (ii) Flour of England, fruit of Spain, /f/, /f/, /éin/
イギリスのメリケン粉と、スペインの果物が,
Met together in a shower of rain; /éin/ 雨に濡れ,
Put in a bag, tied round with a string. /rín/ 袋に入れられて、縛られて、
If you will tell me this riddle, I'll give you a ring. /rín/
このなぞ解けたら、指輪をやるよ。(スモモのプディング : plum-pudding)
{一行目の/f/の頭韻と1, 2行目の/éin/, 3, 4行目の/rín/という脚韻がある。}
- (iii) Through a rock, /r/ 岩を貫き,
Through a reel, /r/ 糸車の中を通り,
Through a sheep's shank bone, /ʃ/, /ʃ/, /óun/ 羊のすねの骨をも通り抜ける。
Such a riddle was never known. /óun/ こんななぞは聞いたこともない。
(稲妻 : lightning)
- (iv) Little Nancy Etticoat, /étikòut/ かわいいナンシー・エチコート,
With a white petticoat, /étikòut/ 着ている白いペチコート
And a red nose; /óuz/ 赤い鼻を突き出して,
She has no feet or hands, /éenz/ 手もなければ足もない。
The longer she stands /éenz/ 立てば立つほど
The shorter she grows. /óuz/ 低くなる。(ろうそく : candle)
{1, 2行, 3, 6行, 4, 5行に脚韻がある。}
- (v) Stiff standing in the bed, /s/, /s/, /éd/ ベッドの中で身を硬くして立ち,
Sometimes white and sometimes red, /éd/ ときには白くときには赤くなる,
Every lady in the land /l/, /l/, /énd/ 田舎の婦人ならば,
Takes it in her hand, /énd/ 手にとって,
And puts it in the hole before. 口に入れる。(赤カブ : radish)
- (vi) We are little airy creatures, /tʃərz/ 我等は、小さくはかないもの,
All of different voice and natures; /tʃərz/ みんな、声も性質も違う。
One of us in glass is set, /ét/ 1人はガラス (glass) の中,
One of us you will find in yet; /ét/ 1人はイエット (yet) の中,

The other you may see in tin; /ín/ 別の1人はかん (tin)の中,
 And the fourth a box within; /ín/ 4人目は箱 (box)の中, /in/
 If the fifth you should pursue, /j ú:/¹¹⁾ 5番目を追いかけても,
 It can never fly from you. /jú:/ お前さんの足元から, 飛び立つこ
 とはありゃしない。 (A, E, I, O, U)

上の6例には、脚韻があり、特に、(44ii, iv vi)の3例は、すべての行が脚韻を踏んでいる。一語が2回以上繰り返されているのは、(44iii)の‘Through’, (44vi)の‘in’と、4回反復されている(44v)の‘in’である。また、4.3.1-4.3.4までに構文と関連する要素として、等位接続詞の‘and’について言及したが、ここでも、3例(44iv-vi)で見つけられる。また、‘if…’は、(44ii, vi)の2例に含まれている。

4.4 英語のなぞ：繰り返しの特徴

4.1では、反復が音だけに限られたなぞなぞ16例を扱った。それらの多数が脚韻であることが分かった。4.2は、自由形態素の反復が使用されていない拘束形態素の繰り返しだけの例を検討したが、2例のみであった。4.3では自由形態素が含まれるなぞなぞの例を扱った。その例の中で、まず、韻が使われていないなぞなぞを検討した。1語だけの繰り返しの例が9例で、2語以上の反復が含まれるなぞなぞは13例あった。次に、自由形態素だけでなく韻の反復も含む組み合わせで、1種類の韻だけの例は15、2種類の韻は11例、3種類以上の韻は、6例見つかった。全体のサンプル数130のうち、音・形態素のいずれか、または両方が反復されたなぞなぞは、72例(55.4%)もあった。その内、反復表現に韻が含まれる例は、49例(約37.7%)であり、多数が脚韻であった。また、句・文レベルでの3回以上の反復と、等位接続詞‘and’が頻繁ではないが、ある程度の割合で観察されている点が注目に値する。

5. 日英間の共通点と相違点

3節と4節で、日本と英語のなぞなぞに於ける反復の役割を考察するために、音のみ、拘束形態素、自由形態素に大別し、それぞれの分類の例数と割合を調査すると同時に、それらの特徴も検討した。その結果を要約したのが、表1である(小数点以下2桁を四捨五入した)。

表 1 : なぞなぞに反復を含む例数と割合

	日本：二段なぞ [総数158]	英語 (英米) のなぞ [総数130]
音 (韻) のみ	11 (7.0%)	16 (12.3%)
拘束形態素	35 (22.2%) (構文を含む：27 (17.1%))	2 (1.5%) (韻を含む：2 (1.5%))
自由形態素	30 (19.0%) (構文を含む：22 (13.9%))	54 (41.5%) (韻を含む：31 (23.8%))
総数	76 (48.1%) (構文を含む：49 (31.0%))	72 (55.4%) (韻を含む：49 (37.7%))

上の結果から日本と英語の反復表現の共通点と相違点を考えてみよう。共通する特徴は、反復の頻度の多さである。日本が5割に近く、英語は5割以上で、両語とも極めて高い割合であり、反復の役割の重要性を十分に示唆していると考えられる。幾つかの相違点があるが、最も割合が異なるのは、拘束形態素の割合である。膠着語である日本語は「～は、～で、～ば、～ても」等、助詞が多く反復されているが、これらは、拘束形態素である。言語構造が異なる英語で、拘束形態素の例が少なかったことは当然であるかもしれない。また、日本のなぞなぞは、音の繰り返しが目立った働きをしていないのに対して、英語のなぞなぞでは、韻が極めて重要な役割を果たしていることに留意すべきである。

これらの相違点に基づくと、日・英それぞれの最も顕著な特徴が見いだされる。即ち、日本のなぞなぞでは、反復が構文と関連している点が最も注目に値する。反復が構文に含まれる数は49例 (31.0%) で、「は～、は～」や、「～で、～で」「～ても、～ても」など、それ自体が繰り返されているものと、「～ば～ほど」等それ自体に反復がないが、その構文に使用される動詞の語幹 (拘束形態素) が繰り返されている例があった。それでは英語はどうであろうか。(41xii) (42xv) (43xi) に、ある程度共通した構文が認められる。以下にこれら3例で最初の部分だけを取り上げる。

- (45) (=41xii) On the hill there's a green house,
 In that green house there's a white house,
 In that white house there's a red house,....
- (=42xv) There was a little green house;
 And inside the little green house

There was a little brown house;
 And inside the little brown house....
 (=43xi) Down under the hill there was a mill,
 In the mill there was a chest,
 and in the chest there was a till,

上に挙げた例では, ‘there is/was’ と, ‘in/inside the/that...’ という部分が繰り返されていることが分かる。しかし3例しか見つからなかったので, 生産的な構文とは言い難い。また, 上の構文の他に, 4節で指摘したように等位接続詞の ‘and’ や ‘but’ がある程度の割合で使用されている。同様に, ‘if...’ で導かれる表現も数例以上見た。しかしながら, 日本のなぞなぞで頻繁に観察されるような反復との関連性があるとは思えない。従って, 反復表現にかんして, 日本のなぞなぞの特徴が「構文」であるのに対して, 英語のなぞなぞの特徴は, 高い頻度 (49例(37.7%)) で使用されている「韻」であると考えられる。

それでは, 言語の違いによって遊びの要素は, どのような影響を受けているのだろうか。今回検討した子供のことば遊びである日本の二段なぞと英語のなぞについて言えば, なぞなぞを解くこと自体, 言語が違っていても, 認知レベルの働きは, ほとんど同じであると想像できる。しかし, 言語が違えば, 表現方法自体が異なるのは当然であり, その理由から, ことば上での遊びは異なってくる筈である。今回の考察から, 音, 語, 句の反復表現が多く使用される特徴は, 日本語と英語の両言語で認められ, それぞれの表現形態の特色も明らかにされた。つまり, 日本のなぞなぞでは, 繰り返しと構文の結びつきが強く, 英語では, 韻との強い結びつきが確認されたのである。従って, 別の見方をすれば, 子供にとってなぞなぞは, 解く以外の楽しみが, 英語では「音 (=韻)」であり, 日本語では「型 (=構文)」であると推測される。

日本のなぞなぞは, 構文が子供を楽しませるという可能性を発展させると, 構文を利用して生産的になぞなぞが作り出されることも推測される。例えば, 「～ば～ほど」という構文は, 語幹が繰り返されているが, (16ii) 「大きくなればなるほど小さくなるもの (答え: 着物)」では, 反義語 [大きい-小さい] が用いられ, (16iii) 「拭けば拭くほどよごれるもの (答え: ぞうきん)」では反義語はない。しかしこれら二つのなぞは, 矛盾を表している。答えを考えずに, 質問だけを作るのであれば, これらの構文に反義語を入れても入れなくても矛盾を表現することで, 上にあげた

例と似た数多くのなぞなぞを容易に作り出すことができる。例えば、次のようななぞはどうであろうか。

- (46) (i) 広くなればなるほど、狭くなるもの。
- (ii) 高くなればなるほど、低くなるもの。
- (iii) 食べれば食べるほど、おなかがすくもの。

上の最初の2例は、[広い-狭い][高い-低い]という反義語が含まれて矛盾を表している。(46i)の答として、「庭」(家が広くなれば、庭が狭くなるから)などが考えられる。また、(46ii)は、「天井」(身長が高くなれば天井が低くなることから)が可能な答えになるだろう。反義語が用いられていないが、矛盾を表す(46iii)は、「道草」を一つの解答とすることができる。

同様に、「～時(に)、～時(に)」という構文は、(27i)「居る時戸を閉めて、居ぬ時開けとくもの(答え: 厩^{うまや})」では、2組の反義語[居る-居ぬ][閉める-開ける]が使われ、矛盾を表している。この構文で、別の2組の反義語である[暗い-明るい][見える-見えない]と入れ替えれば、次の問いが作られる。

- (47) 暗い時見えて、明るい時見えないもの。

上の問いの答えとして、「星」または「蛍」等が考えられる。このように、構文自体がなぞなぞ創作の役割を担っていることが分かる。日本のなぞなぞは、構文が生産性に貢献していると考えて間違いのないであろう。

6. 結論

言語とことば遊びの関連性を探るために、本論は反復表現に関して、日本と英語のなぞなぞを考察した。繰り返しは、なぞなぞに観察される傾向があるが、二言語間での共通点と相違点を明らかにするために、『世界なぞなぞ大辞典』(1984)で紹介されている「日本本土のなぞなぞ」と「イギリスのなぞなぞ」をサンプルデータとして、日本の伝統的な子供向けの「二段なぞ」と、英語(イギリスとアメリカ合衆国)のなぞなぞを比較検討した。サンプル数は日本の二段なぞが158、英語のなぞは130であった。最初に反復の機能と頭韻、脚韻等の韻の種類を概観した後、3節では、日本の二段なぞの反復にかんする調査結果が述べられた。次の4節は、英

語のなぞの反復を取り扱った。5節では、調査された結果から共通点と相違点について考察した。両言語で共通した特徴としては、音、語、句等の繰り返しの頻度が高く、5割程度あったことである。次に、相違点は、日本のなぞなぞが、ある種の構文との関連から、反復が見つけられた数が全体の3割である一方、英語のなぞなぞでは、反復と構文との関係性が十分に観察されなかったことである。また、英語のなぞなぞでは、韻（形態素の繰り返しを含まない）が全体の3分の1以上に使用されていることが分かった。それに対して、意味とは無関係の音の繰り返しは日本のなぞなぞでは1割以下であった。要約すると、なぞなぞに於ける反復表現で中心的な役割を担っているのは、日本の二段なぞでは「構文」、英語のなぞでは「韻」、であることが明確になった。

注

- 1) 『世界なぞなぞ大辞典』の中の「イギリスのなぞなぞ」という項に収録されているのは、イギリス（ウェールズやスコットランドのハイランド地方などのケルト語圏を除く）とアメリカ合衆国に限る英語のなぞなぞで、日本の読者にもわかりやすく面白いものである。橋内(1990)は、英語のなぞなぞは、解き方から「意味解きなぞ」、「音解きなぞ」、「文字解きなぞ」の3類型に分類している。これに従うと、収録されている130のなぞなぞの内、「意味解きなぞ」は112、「音解きなぞ」は10、「文字解きなぞ」は8例である。
- 2) サンプル数は、清海(2012)で扱ったなぞなぞの数と同じである。実際に日本のサンプル数の方が1.2倍であるが、後に比較考察する時は、割合で捉えることにするので問題は生じないと思われる。
- 3) これより、繰り返されている部分は、同じ種の下線部で示されている。
- 4) 「薬九層倍（くすりくそうばい）は、『広辞苑』によると、「薬の値は原価にくらべて非常に高く、暴利をむさぼっているとしていう」と説明されている。
- 5) 英語の脚韻については、2.3.2で説明している通り、異なる意味を表す2語間で、同一音の繰り返しが生じている場合は、不完全な韻(Incomplete Rhyme)であるとされている。
- 6) 日本語訳は、『大修館英語学事典』（1983：823）から引用した。
- 7) 興味深いことに、最近では日本のラップ音楽で、韻を意識した詩が盛んに作られているようである。
- 8) この二段なぞは、地域によって表現が違うのだが、以下のように、各表現に繰り返しが含まれていることに注目したい（鈴木 1986:175）。

- (i) 針屋の前を皮屋が通り, 皮屋の前を洪屋が通り, 洪屋の前を箕屋が通るものナニ。
(福井県)
- (ii) 針山越えて皮山越えて, 中に実がはいっているもの。(大阪府)
- (iii) 釘屋の隣は皮屋, 皮屋の隣は洪皮屋, そのまた隣はうまいもん。(新潟県)
- (iv) とげ屋の隣の, 皮屋の隣の, 洪屋の隣の, 中のお女郎_{ナニ}。(神奈川県)
- 9) このなぞなぞの1行目と2行目に‘I’が2回使われているが, 文の語頭と文中であり, 近接していないので, 繰り返されているとは考えなかった。
- 10) ‘Again’の発音は二つあり, 一つは/əɡén/で, ‘men’と脚韻を踏むが, もう一つの発音は, /əɡéin/で, この場合は韻を踏まないことになる。
- 11) ‘Pursue’の発音は, /pərsú:/と/pərsjú:/の二通りある。

参考文献

- 池上嘉彦 1967 (1974⁷). 『英詩の文法』 研究社出版, 東京.
- 池上嘉彦 (編) 1985 (1996⁶). 『英語の意味』 <テイクオフ英語学シリーズ> 大修館書店, 東京.
- 奥津文夫 2000. 『日英ことわざの比較文化』 大修館書店, 東京.
- 清海節子 2012. 「日本と英語のなぞなぞ比較 (1): 反義語の用法を中心に」 『駿河台大学論叢』 44: 87-110.
- 鈴木棠三 1986. 『日本のなぞなぞ』 (岩波ジュニア新書117) 岩波書店, 東京.
- 橋内武 1990. 「英語のなぞなぞ」 『国際文化論集』 3: 79-99.
- Jakobson, Roman. 1960. “Linguistics and Poetics” in T. Sebeok (ed.), *Style in Language*, 350-77. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Leech, Geoffrey N. 1969 (1976⁵). *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman.

辞典

- 『英語学要語辞典』 寺澤芳雄 (編) 2002. 研究社.
- 『世界なぞなぞ大辞典』 柴田武, 谷川俊太郎, 矢川澄子 (編) 1984. 大修館書店.
- 『大修館英語学事典』 松浪有, 池上嘉彦, 今井邦彦 (編) 1983 (1986²). 大修館書店.